

# 3月末～5月の低温・凍霜害に関わる農作物への技術対策について

平成22年5月24日  
農業技術課

## 1 果 樹

果樹類では、花器の異常や不受精、果実障害等の影響が確認されている。被害状況は地域や品目、品種により異なるので、状況に応じた作業が必要である。

### (1) 全般

- ・ 結実状況や新梢等への被害は、品目、品種、園地により異なるので、それぞれの園地状況をよく確認する。
- ・ 結実が良好な園地や、被害の軽微な園地から摘果等の作業を実施する。
- ・ 凍霜害の発生年は、観察をするあまり摘果作業が遅れることが多い。このため、果実の肥大が不良となりやすいので、(状況を確認して)作業可能な園地から計画的に摘果を進め、摘果作業が遅れないようにする。

### (2) りんご

- ・ ガク立ちにより結実が確認できるが、被害の大きな園地では胚珠が傷んでいることも予想されるので、果実の肥大状況を確認してから摘果を始める。
- ・ 被害程度が非常に大きな場合以外は、腋芽果を利用することはないので、腋芽果は摘果する。
- ・ 「ふじ」以外の品種は側果を利用すると「つるさび」の発生が多くなるので、中心果の利用を基本とする。しかしながら、本年は中心果が被害を受けている場合が多いので、中心果、側果に関わらず、肥大の良い果実を残す。
- ・ 「シナノゴールド」や「秋映」等に果柄の短い果実が見られ、特に中心果に多い。果柄はやや短くとも果実が大きい場合は、中心果を残す。ただし、果柄が短すぎると着色管理や収穫作業に支障があるので、極端に果柄が短い場合は摘除する。
- ・ 今後、肥大の不ぞろいやさび等の果面障害が予想されるので、仕上げ摘果では果実をよく観察して残す果を選択する。
- ・ 樹冠下部の被害が大きく、上部の被害が軽い場合は、上部に多めに着果させてもよい。ただし樹全体の着果量は基準どおりとする。
- ・ 着果量が少なくなると新梢伸長が旺盛となり、翌年の花芽形成にも影響する。よって、着果量が少なくなりそうな場合は、不良果であっても残す。

### (3) な し

- ・ 特に「南水」の園地で着果不足の園地が見られる。このため、結実の良い園地から摘果作業を行う。
- ・ 摘果時には、多少の傷があっても肥大の良い果実を残す。
- ・ 結実量が少ない場合は、予備摘果時期を遅らせ、樹体生育が旺盛になりすぎないようにする。
- ・ 結実不足の園地では、果形や肥大の劣る果実でも残しておく。この際は「子持ち花」の中の「子花」まで利用して、できるだけ結実確保を図る。原則として1果そう1果とする(1果そうに2果つけたものでも仕上げ摘果時、袋かけ時には1果とする)。
- ・ 同一樹内でも結実状況が異なる。結実の良好な部分にやや多めに成らせてもよい。ただし、部分的に多くしすぎると、果実肥大や翌年の花芽に影響するので注意する。
- ・ 仕上げ摘果時は、果形、果面、果柄を上方からもよく観察し、変形果やさび発生の著しいものから摘果する。結実が悪い場合には変形果が多いので、できるだけ正形果にそろえる。
- ・ 誘引棚付けしてある新梢は棚から外し、短果枝を維持する。ただし、「幸水」はそのまま様子を見る。

#### (4) もも等核果類

- ・核果類全般に、通常の着果量が確保できそうな品種は、予備摘果をすすめ果実肥大の良い幼果を残す。
- ・ももは、明らかに着果量が少ないと思われる園や品種は、予備摘果を2週間程度遅らせ、摘果量も減らしすぎないように注意し、果実の急肥大を抑制する。このような場合、果実が結果枝基部や生育が遅れる位置に多い傾向となる。仕上げ摘果時には落ちやすい果実や小玉果を摘果するが、1割程度多めに果実を残して核割れを防ぎ、硬核期の袋かけ時に最終着果量に調整する。
- ・すもも等では、サビ果の発生に注意する。
- ・すももやプルーンの結実不良園では、成熟期に果実が押し合わない程度までは部分的に多めに結実させてもよい。
- ・おうとうの着果が少ない場合は、着果しているクラスタには通常よりやや多めに着果させてよい。ただし、着果量が多すぎると着色が不良となったり、翌年の樹勢等に重大な影響が出ることもあるので留意する。下枝の着果が少ない分を上枝に着果させ過ぎない。

#### (5) かき

- ・樹冠下部の新梢が傷んでいる園地が見られる。被害程度の軽い新梢については通常の管理をする。
- ・被害程度の大きな園地では生育が旺盛となりやすいので、追肥は行わず、徒長枝等の整理を行い新梢の充実を図る。

#### (6) ぶどう

##### ア) 新梢管理

- ・ほぼ主芽が利用できそうな状況である。花穂があり、勢いのある新梢にそろえる。

##### イ) 今後の管理

- ・低温により生育が昨年より4～5日遅れている。有核巨峰の開花は梅雨時に入る恐れがあるため、房切りは多めに行っておく。
- ・生育が遅れると防除間隔が開くことも予想されるため、特別散布や発生予察など、防除指導を適切に行う。

## 2 野菜

#### (1) すいか

- ・凍霜害の影響で孫づるを利用する等して主枝がそろわない株については、葉数を確保してから着果させる。また、過度に草勢が強すぎる場合は、着果節位を下げる。
- ・低温による雌花の異常が確認された場合、その節に着果させるのは止めて、つるを引き直し、着果節位を1段上げて着果させる。